

被災地に花種贈る

東北支援に取り組む庄司博彦さん

富士市富士見台のフォトジャーナリスト庄司博彦さんがこのほど、平成23年の東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県、宮城県、福島県の小中学校や幼稚園など6カ所を訪ね、花の種1200袋や堆肥30キを寄贈した。庄司さんは震災直後から被災地を訪れ、現地の人々との交流を深めてきた。活動に込める思いを聞いた。

「子どもが元気になるれば町に活気が生まれる」との思いで、現地の小中学校などで、写真を見たり撮ったりする体験を通じて心を癒やすフォトセラピーや本の寄贈といったボランティア活動を展開した。コロナ禍で活動を一時中断していたが、今回約3年ぶりに被災地を訪ね、「待っていたよ」「久しぶりだね」と声を掛けてくれる人もいた。涙が出るほどうれしかった。直に会い、心を通わせることの大切さを改めて感じた」と振り返る。

花の種は県グリーンバンクから提供してもらった。以前は本を贈っていたが、「震災から10年以上がたった今、もっとふさわしいものがある」と企画。「学校の片隅に小さな花が咲いたとき、子どもたちの『心の復興』につながる」と思いを込めた。肥料は自身がアドバイザーを務める富士宮高校会議所が開発した製品を寄贈。震災直後から「山田町応援プロジェクト」に取り組む笑点メンバーの山田隆夫さんのサイン入り色紙、須藤秀忠富士宮市長が山田町の佐藤信逸町長に宛てたメッセージ、富士市から提供を受けた「富士のほうじ茶」なども届けた。

01年、アメリカ同時多発テロを取材した際のこと。暗い表情の大人たちの中、「カメラを向けると子どもが笑ってくれた。重苦しい雰囲気が一瞬和らいだように感じた。帰国後ワールドチルドレン

フォトプロジェクトを立ち上げ、世界各地で写真教室を開催。東日本大震災の被災地の学校でも授業の一環として定期的にフォトセラピーに取り組んだ。被災地訪問にはもう一つ、「復興の実情を

この目に焼き付けて、多くの人たちに伝えたい」との思いがある。「国が被災地の状況などお構いなしに、復興が進まず周りに人がいないのに、巨大な道路や建物を作った場所がある。石巻の巨大な防潮堤の功罪もうやむやにされてしまっている。現地に行つて、アリの目で見たいこと、感じたことを発信したい」アリの目は人々の生活の目線。そこから見た景色こそが、次世代に語り継ぐべき復興の

富士市は南海トラフ地震により大きな被害が発生する可能性がある。「そういう場所だからこそ、東北の被災地の現実を直視しなければ。これからは現地の人たちとの交流と復興の現実を伝える活動を続けていきたい」と力を込める。



被災地の子ども園を訪れて園児たちと交流(提供)



写真アルバムを見ながら被災地での活動を振り返る庄司さん(上) 〓、現地の人々に山田隆夫さんの色紙を渡して交流(提供) 〓左



富士宮市長に山田町長からの感謝の色紙を渡す(提供)

復興の現実を伝えたい